

## 令和5年度 東京都立戸山高等学校学校経営報告

校長 決定

## 1 今年度の取組状況と取組目標に対する自己評価

自己評価の基準：【A】十分達成できた 【B】概ね達成できた 【C】あまり達成できなかった

## (1) 学校経営・組織マネジメント

今年度の取組目標	具体的な方策	今年度の取組状況
<p>ア 学校組織マネジメントを意識した学校経営</p> <p>【A】</p>	<p>① 校務分掌を中心とした様々な業務のシンプル化、「見える化」を図り、全教職員が内容を把握できるようにする。</p> <p>② マンパワーに頼ることなく、組織として課題解決に向けた業務ができるような業務の分散化、計画的な人材育成と人材配置（人事異動）を実施する（属人的な業務遂行から、組織的な業務遂行への変換）。</p> <p>③ 客観的なデータに基づいた学校経営・校務分掌の推進</p> <p>④ 効率的な予算編成並びに執行（選択と集中）</p> <p>⑤ 教職員の勤務時間の負担軽減を考慮した働き方改革の実現</p>	<p>① 企画調整会議資料や職員会議資料の冒頭に毎回校長の考えを提示し、校長の経営計画の周知を図った。</p> <p>② 適材・適所を考慮し、教員の特性を学校経営に活かす組織的な人材配置を心掛けた。やる気のある若手に積極的に活躍の機会を与え、人材育成を図った。若手教員が積極的に動き、フランス研修が実施できた。</p> <p>③ 企画調整会議及び職員会議において、模擬試験や学校説明参加者等の結果を数字で示すとともに、分掌や学年に分析・対応策を指示した。</p> <p>④ SSHの予算減を反映した中・長期的予算編成を行った。</p> <p>⑤ 授業のない曜日にテレワークを行う教員が増えた。産業医との面談を実施した。年休の平均取得率は42.3%で昨年度より1.3%向上した。</p>
<p>イ 感染症まん延時や災害発生時における学習環境の維持に向けたスキルの修得</p> <p>【A】</p>	<p>① パラダイムシフトにおける授業のあり方の検討、家庭学習や長期休業期間中におけるオンデマンド授業や反転学習等、ICTを活用した学習の実践</p> <p>② デジタルデバイドを意識した情報発信（あらゆるメディアを活用した情報発信）</p> <p>③ オンライン学習デーにおける授業内</p>	<p>① 長期休業中の講義をオンデマンドで配信する教員が増えた。通常の授業でも予習を中心とした反転学習に取り組む教員が出てきた。</p> <p>② 個人端末やHPを活用し、自宅におけるネットワーク環境に配慮した情報発信を行った。</p> <p>③ オンライン学習デーはスムーズに実施できた。講師等、当日授業の</p>

	容の充実	なかった教員のスキル向上が今後の課題である。
ウ カリキュラム・マネジメントを意識した教育課程の編成 【B】	<ul style="list-style-type: none"> <li>① 教科横断型の教育課程の編成</li> <li>② 全教科・全単元のルーブリックの作成と教科毎に評価規準を統一した観点別評価の実施</li> <li>③ 共通テストに対応した教育課程の編成</li> <li>④ 全校的視野をもつ専門家集団としてのカリキュラム委員会の開催</li> <li>⑤ 時数・定数ありきではなく、最善の教育課程の検討</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>① 総合的な探究の時間である学校設定科目「知の探究Ⅰ・Ⅱ」については、引き続き改善を図る。</li> <li>② 新学習指導要領に基づいた観点別評価は2学年まで完成した。</li> <li>③④⑤ 教養主義及び共通テストに対応した教育課程についてカリキュラム委員会で検討を行った。次年度も継続して検討する。</li> </ul>
エ Tokyo スマート・スクール・プロジェクトの実現 【B】	<ul style="list-style-type: none"> <li>① Wi-Fi 環境の整備により、ICT を最大限に活用し、密度の高い教育活動を行うため、Microsoft Office365 を活用した、学校評価やアンケート集計等の実施や部活動指導員のアウトソースの活用</li> <li>② 職員会議等の会議におけるペーパーレス化と電子起案化の推進</li> <li>③ 働き方改革により夏休完全消化、有給休暇15日以上取得</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>① 教材配布や連絡だけではなく、様々な場面で Teams の活用が進んだ。アンケート集計において Forms を利用する等、ICT を積極的に活用した。また、リクルート社のスタディサプリを導入し、補習や反転授業等に動画視聴の活用を促した。</li> <li>② 職員会議のペーパーレス化を実施した。電子起案率は100%達成できた。</li> <li>③ 夏季休暇については、ほぼ全員が5日間消化できたが、有給休暇40日中15日(取得率37%以上)取得した教職員は約8割であった。</li> </ul>
オ 特色化を意識した教育課程の編成 【B】	<ul style="list-style-type: none"> <li>① 進学指導重点校として難関国公立大学受験に対応した教育課程の編成</li> <li>② SSH及びTMの目的を達成できる事業構築</li> <li>③ 総合的な探究の時間(人間と社会)における体験活動の充実</li> <li>④ SSHとTMと連動したSTEAM教育の検討並びにSDGsを意識した教育活動の実施</li> <li>⑤ 教科横断型「知の探究(総合的な探究の時間)」における探究活動の充実及び全校指導体制の検討</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>① SSHクラスにおける情報科目の履修について検討を行った。</li> <li>② 職員会議において事業内容を周知し、SSHの行事における業務を学校全体に割振った。</li> <li>③ 「人間と社会」は、防災体験やTGG体験等を実施した。</li> <li>④ SS科と知の探究科の連携により、STEAM教育の実践を図った。「知の探究Ⅱ」においてSDGsをテーマとした探究活動を実施した。</li> <li>⑤ 「知の探究Ⅱ」において、年間授業計画の見直しを図った。</li> </ul>

(2) 学習活動

今年度の取組目標	具体的な方策	今年度の取組状況
<p>ア 「東京型教育モデルの実現」 【B】</p>	<p>① 板書と講義中心の受動的・一方通行的な授業形態から、生徒が活動する主体的・対話的で深い学び（アクティブラーニング）の実践</p> <p>② Teams や Forms 等の Office365 を活用した授業実践、及び模試のビックデータを活用した個に応じた学習指導・進路指導の実施</p> <p>③ 統合型校務支援システムへの成績処理等の移行と同システムの活用</p>	<p>① アクティブ・ラーニングに取り組んではいるが、生徒の主体性を引き出すまではならず、単なるグループ学習に留まっている例もある。</p> <p>② Office365 は、すべての学年、教員において活用できた。国公立大学二次支援対策として、模試のデータ等を活用し、個別指導を実施した。</p> <p>③ 統合型校務支援システムへの成績移行を無事に行った。採点や観点別評価で活用されている。</p>
<p>イ 新学習指導要領に対応した授業展開 【B】</p>	<p>① 同一科目における評価規準の統一、全定期考査の共通問題化を図り、観点別評価を含めた学習評価の規準を統一する。</p> <p>② 新たな科目に対応した教材研究の充実</p> <p>③ 大学入学共通テストに対応した学校設定教科・科目の設定</p>	<p>① 定期考査の共通問題化について、すべての教科で実施し、観点別評価についても評価規準の統一を図ることができた。</p> <p>② 新学習指導要領に基づいた新たな、歴史総合については、担当者間による教材研究が進んだ。</p> <p>③ 次年度の3学年の自由選択科目「情報演習」を設置した。</p>
<p>ウ 進学指導重点校としての学力向上に向けた組織的、継続的な取組み 【A】</p>	<p>① 習熟度授業及び少人数授業、夏期講習等により個々の生徒の学力、進路希望先に合わせた学習指導の推進</p> <p>② 成績上位層に向けた授業実践と「高い志望形成」に対する個別指導（志望校を下げない指導）の充実</p> <p>③ 入学時からの学力の定点観測と「学力進路データベース」の整備により個々の生徒の状況を全教員で共有し、学力の向上と進路希望の実現</p> <p>④ 授業のプロとしての50分の授業における寝かせない授業、他教科学習をさせない授業の実践</p> <p>⑤ 相互授業参観期間を活用した指導教諭並びに進学指導研究生を中心とした全教科における授業研究の実施（相互授業参観年間3回実施）</p> <p>⑥ 中間層・下位層の学力の底上げ</p>	<p>① 英語、数学において習熟度並びに少人数授業を展開し、生徒の学力、希望進路に合わせた夏期講習、3学期の特別授業を実施した。</p> <p>② 東大現役合格8名、難関国公立大学（国公立医学部等を含む）46名の合格者を輩出できた。</p> <p>③ 進学指導対策会議を年間13回開催し、模試の分析等を教職員間で共有できた。</p> <p>④ 生徒の知的好奇心を刺激し、寝かせない授業・他教科学習をさせない授業の取組を行った。</p> <p>⑤ 進学指導研究生及び中堅教諭資質向上研修の研究授業を中心に、授業研究を実施した。</p> <p>⑥ 個別指導や課題により底上げを図った</p>

<p>エ AI時代に対応した学力の育成</p> <p>【B】</p>	<p>① リーディングスキルテスト等の結果に基づき、すべての教科において、読解力を育成するための授業内容の再構築</p> <p>② 読書活動を通じた思考力・判断力・表現力・創造力の育成</p> <p>③ スマート・スクールを意識したBYODを中心としたタブレット端末等の活用やTeams等を活用した授業展開の実施</p>	<p>① 1学年の12月にGPSテストを実施。その結果を校内研修により全教職員で情報を共有した。各教科により、スキル向上のための対策を行った。</p> <p>② 図書館司書の取組により、新刊本の紹介等、読書活動を推進した。</p> <p>③ 1・2学年が個人端末を購入し、教育活動全般で生徒及び教員がTeamsやFormsを活用した。</p>
<p>オ 英語教育推進校として4技能をバランスよく育成し、将来国際社会に貢献できる人材の育成</p> <p>【B】</p>	<p>① オンライン英会話やJETの活用等により、特に「聞く」「話す」力の育成</p> <p>② 4技能を測定する外部検定試験(GTEC等)を1学年、2学年全員に受験させ、総合的な英語力を育成</p> <p>③ JETを活用し、現代英語として適切な表現ができる力の育成とともに、理数論文等でも的確な表現ができる力の育成</p> <p>④ TGG(Tokyo Global Gateway)を活用したアウトプット場面の設定</p>	<p>① 1学年を中心にオンライン英会話を実施。</p> <p>② GTECを1学年、2学年にそれぞれ1回ずつ受験させ、4技能の測定を実施し、授業改善に結びつけた。</p> <p>③ JETによる指導を行い、表現力の育成に力を入れ、SSHにおける英語による発表に結び付けた。</p> <p>④ 1年時にアウトプットの機会として3月にTGGを利用した。</p>
<p>カ SSH第IV期最終年度の総括及び次期指定に向けた取組</p> <p>【C】</p>	<p>① SSHクラス以外の生徒が学校設定科目「知の探究Ⅰ」と「知の探究Ⅱ」の円滑な接続の考慮したカリキュラム開発</p> <p>② 科学の甲子園等のコンテストでの上位入賞、生徒の英語での研究発表回数の増加</p> <p>③ 生徒研究成果合同発表会と理系女子交流会(マリーハウス)の開催</p> <p>④ テレビ会議システム等を有効に活用しながら、海外を含む研究機関や大学等との共同研究や直接交流、他のSSH校との連携強化促進</p>	<p>① 「知の探究Ⅰ」を通して、研究テーマの設定、仮説、調査・実験、検証、まとめの流れを学び、「知の探究Ⅱ」の履修に繋げた。</p> <p>② 京都大学ポスターセッションにおいて優秀賞を受賞</p> <p>③ 今年度から理系女子交流会を発展的解消し、男子生徒とともに女性研究者育成に関するキャリア懇談会を開催した。</p> <p>④ 海外の高校生と本校において対面で研究発表を実施した。</p> <p>⑤ SSH講演会やリレー授業等を</p>

	<p>⑤ 全生徒を対象に SSH 講演会や教科融合（連携）型の講義、ワークショップの実施により、理数リテラシーの育成並びにプレゼンテーション能力の育成</p> <p>⑥ SSH クラスの教育課程の保障と研究環境の維持</p> <p>⑦ 本校を志望する生徒の希望と募集対策の観点から SSH の再指定</p>	<p>計画的に実施できた。</p> <p>⑥⑦第Ⅴ期申請は採択されなかったが、経過措置により教育課程の特例は認められた。削減された予算の中で工夫して研究活動を継続する。経過措置期間中に再指定に向けて第Ⅴ期の研究計画の見直しを図る。</p>
<p>キ 「知の探究」の充実</p> <p>【B】</p>	<p>① SSH の研究開発で得た知見の「知の探究」への活用</p> <p>② 全校体制での探究活動の支援に向けた準備</p> <p>③ 研究発表会実施に向けた準備</p> <p>④ 「知の探究」（総合的な探究の時間）の指導力の向上</p>	<p>① 「知の探究」の発表会で SSH クラスの生徒がメンターを務めた。</p> <p>② 「知の探究」担当者を中心に探究活動の共通理解を図った。</p> <p>③ 1・2 学年とも発表会を実施</p> <p>④ 授業実施前に「知の探究」担当者が授業内容の擦り合わせを行った。</p>

(3) 進路指導

今年度の取組目標	具体的な方策	今年度の取組状況
<p>ア 進学指導重点校としての 1 学年からの系統的、組織的な進路指導</p> <p>【A】</p>	<p>① 学習ガイダンス等の丁寧な実施により、入学時の高い進学目標を維持させ、目標達成に向けた努力を促す。</p> <p>② ビックデータを活用した進学対策会議を中心に志望校検討会議も活用しながら進路部を中心に学年と教科が個々の生徒の情報を共有することで、組織的な学力向上と希望進路の実現を図る。</p>	<p>① 現役合格者による卒業生講話や進路ガイダンスを通じて、目標達成に向けたモチベーションの涵養をすることができた。</p> <p>② 進路部やTM部を中心に、3 学年と連携しながら月 1 回の進学対策会議をとおして、模試結果の情報を共有しながら、各教科の指導へとフィードバックできた。</p>
<p>イ 長期休業期間中の講習参加生徒の増加</p> <p>【A】</p>	<p>① 各教科で講習内容を検討し、進路指導部を中心に全校体制で効果的な講習を実施する。</p> <p>② 長期休業日中は、部活動、学校行事の準備より講習を優先するように生徒指導を行い、講習参加者の増加を目指す。</p> <p>③ 早い時期に長期休業日中の講習の講座数・日程等を生徒に周知し、生徒に長期休業日中の学習計画の作成を促す。</p>	<p>① オンデマンド講習により、部活動に便宜を図る講座があった。長期休業中の講習は進路部を中心に全教員で対応し、戦略的に開講した。</p> <p>② 定期的な朝学習を実施する部活があった。講習を含めて、全教職員で対応した。</p> <p>③ 教科で日程・教室の調整を行い、長期休業中における講習の充実を図ることができた。</p>

<p>ウ TM の取組みにより、医学部医学科進路希望者への進路実現</p> <p>【A】</p>	<p>① 模擬試験やクラウド等を活用し、個々の生徒の学習状況と学習成果を迅速かつ的確に把握した指導を実施する。</p> <p>② 在京の医科大学や医学系研究機関、病院等と連携し、オンラインを含めた生徒向けの講演会、見学会、体験実習等を実施し、課題研究と研究発表会を実施する。</p> <p>③ 1 学年から十分な自主学習時間を確保させ、文系科目も含めて基礎基本を取りこぼすことなく学習させる。</p> <p>④ TM に参加していない生徒も含め、医学部医学科に対する進路情報を提供し、自分に合った大学を受験できるように支援する。</p>	<p>① Teams やスタディサポート等を活用し、学習状況調査を把握し、普段の学習指導や個人面接に生かすことができた。</p> <p>② 都立病院や医科大学等による対面の実習を実施し、体験や研修内容について発表会を開催し、報告書を作成した。</p> <p>③ 模擬試験の受験だけでなく、結果に基づき、面接時に学習時間の確認・指導を行った。</p> <p>④ TMplus として、TM に参加していなかった医学部進学希望者に対しても情報提供を行い、国公立大医学部医学科の現役合格者数が 6 名から 8 名に増加した。</p>
<p>エ キャリア教育の重視</p> <p>【A】</p>	<p>① 学校外の機関や卒業生等からの支援等、外部人材を活用し、進学校としてのキャリア教育の充実を図る。</p> <p>② 進学指導重点校としてのミッションだけではなく、社会との接続（トランジション）を意識した見えない学力や見えにくい学力（コンピテンシー）の育成を図る。</p>	<p>① ロールモデルとして卒業生の合格体験講演会や卒業した社会人からの講話により、将来へのモチベーションを涵養できた。</p> <p>② 知識・理解だけの注入だけでなく、学校行事や部活動を通じて、コミュニケーション能力や、コンピテンシーの育成を図った。</p>

(4) 生活指導

今年度の取組目標	具体的な方策	今年度の取組状況
<p>ア SNS の適切な利用促進に関する指導の徹底</p> <p>【A】</p>	<p>① 望ましい生活習慣を確立する指導の一環として、生徒が意図せずにトラブルや犯罪に巻き込まれたり、他者を傷つけたりすることのないよう、全教職員があらゆる機会をとらえて「SNS 戸山ルール」の徹底を図る。</p>	<p>① セーフティ教室や様々な場面を通じて、SNS の正しい使い方や「SNS 戸山ルール」の徹底を図り、SNS によるトラブルは発生しなかった。</p>
<p>イ 体罰根絶といじめの事前防止・早期発見・早期対応の徹底</p> <p>【A】</p>	<p>① いじめ・体罰に関するアンケートを年 3 回実施するとともに、特に部活動において顧問教諭と外部指導員とが連携して体罰を根絶する体制を構築する。</p> <p>② アンケートの結果により、いじめが発覚した場合には、いじめ防止対策</p>	<p>① いじめ・体罰に関するアンケートを年 3 回実施し、記述内容によっては生徒からの聴き取りを実施。課題として残るものは見受けられなかった。</p> <p>② スクールカウンセラーとの綿密な打ち合わせ等により、生徒情報を共</p>

	委員会を速やかに開催し、初動対応によって重大事案にならないようにスクールカウンセラーを含めた全教職員で組織的な対応を実施する。	有し、定期的な教育相談委員会を開催し、重大事案にならないような組織を確立できた。
ウ 戸山ならではの生活指導の充実 【A】	① 「自主自立」という名の丸投げや放任ではなく、見守る体制を取りながら、学校生活の充実に向け、生徒自らルール作り等ができるように導いていく。	① 生徒部を中心に見守ることを原則に、適宜報告を求めながら必要に応じて助言する生徒指導を行った。

(5) 特別活動・部活動

今年度の取組目標	具体的な方策	今年度の取組状況
ア ホームルーム活動・生徒会活動・学校行事を通した生徒の主体性の育成 【A】	<p>① 本校の伝統である「自主自立」の精神を踏まえ、生徒が自ら課題を見つけ、自ら収集した情報をもとに自ら解決策を考え、自らの意志決定により、問題をよりよく解決していけるよう支援する。</p> <p>② 学校行事において、見通しをもって計画的に準備させることにより、質の確保と行事終了後は速やかに学習中心の生活に復帰できるよう指導し、授業や学業との両立を図る。</p> <p>③ 特別活動終了後は、必ずリフレクション（振り返り）を行うとともに、Forms等の活用によりアンケートを実施し速やかに次年度に向けた反省点を見出していく。</p> <p>④ 経営企画室と連携し、会計担当生徒を指導し適切な会計処理を実施する。</p>	<p>①② 生徒に自分で考えさせ、学校行事等の企画や運営等支援を行うことで、保護者に運動会や戸山祭を公開し、生徒会主催の学校説明会等を実施した。</p> <p>③ Teams や Forms 等を活用した振り返りを必ず行い、次年度に向けた課題を見出すことができた。</p> <p>④ 経営企画室と連携を図り、適切な会計管理・処理を実施した。</p>
イ 部活動を通した健全育成 【A】	<p>① 「部活動に関する活動方針」や文化部・運動部活動ガイドラインに基づき、全部活動が週二日以上完全休養日を設定するとともに、短時間で最大限の効果上げる合理的な活動方法等を工夫することで、学習時間を確保する。</p> <p>② 勝利至上主義に陥ることなく、生徒の自主性を尊重した部活動の在り方を意識した指導を実施する。</p>	<p>① ほぼ従前の部活動に近い、活動を実施することができた。ガイドラインに基づいた日数で効率よく部活動を実施した。</p> <p>② 部活動の在り方については、クラブ管理局を中心に生徒自らその在り方を検討した。</p> <p>③ 部費や部活動に係る予算執行については、生徒任せにすることなく、顧問が適切に関わりながら管理し、</p>

	<p>③ 部活動ごとに口座を開設し、部費を一元管理するとともに、通帳や会計報告等を定期的に管理職が確認することで、適正な部費の執行・管理を行う。</p> <p>④ 教職員の加重負担とならぬように、部活動支援員の活用と部活動の今後のあり方を働き方改革の面から検討する。</p>	<p>通帳及び印鑑は管理職の適切な管理下により執行できた。</p> <p>④ 働き方改革を進めるため、部活動支援員の活動時間を増加し、教職員の負担を軽減することができた。</p>
<p>ウ 「TOKYO ACTIVE PLAN for students」を踏まえた体力向上</p> <p>【B】</p>	<p>① 体育の授業や体育的行事、部活動の充実により体力テストの結果を向上させる。</p> <p>② 運動を楽しみながら、自らの体力を高めていく習慣を身に付けさせる。</p>	<p>① 昨年度に引き続き、体力向上に向けた取組みを実施した。</p> <p>② 新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、体育の授業も種目等に制約を受けたが、体力向上だけでなく、スポーツに親しむ姿勢を育成した。</p>

(6) 安心・安全な環境作り

今年度の取組目標	具体的な方策	今年度の取組状況
<p>ア 心身の健康と安全に対する意識を高めた健全育成</p> <p>【A】</p>	<p>① 地域と連携した総合防災訓練を行うことで、自助・共助の精神を培う。</p> <p>② 自転車使用に関する安全教育指導を行い、自転車通学者の保険の全員加入やヘルメット着用の指導を実施する。</p> <p>③ 「東京都特別支援教育推進計画（第二期）第二次実施計画」に基づき、発達障害等、特別な支援が必要な生徒に対して、合理的配慮に基づく適切な対応を実施するとともに、障害者への理解の促進を図る。</p> <p>④ スクールカウンセラーや養護教諭と連携を図り、定期的な教育相談委員会を実施することで、生徒のメンタル面でのサポートを行う。</p>	<p>① 新宿区や地元町内会、消防署等との連携により、1学年を中心とした総合防災訓練を実施した。</p> <p>② 自転車使用に関しては、学年集会等を活用し、指導を行った。</p> <p>③ 特別な配慮を要する生徒に対し、オンライン授業を実施するなど、合理的な配慮を行った。</p> <p>④ スクールカウンセラーと定期的な情報交換を行い、課題のある生徒の対応については、教育相談委員会等を通じて全教職員で共有化を図った。</p>
<p>イ 危機管理の徹底</p> <p>【B】</p>	<p>① アレルギーや疾病のある生徒に関する情報を校内で共有し、危機管理に努める。</p> <p>② 生徒のメンタル面における小さなサインを見逃さず、迅速かつ組織的</p>	<p>① アレルギーや持病のある生徒に関する情報は職員会議等で全教職員に周知を図った</p> <p>② 見守りリストを共有し、課題のある生徒については情報共有を教員</p>

	<p>な対応を行うとともに、SOSの出し方に関する教育を推進する。</p> <p>③ 学校事故の未然防止(リスク・マネジメント)と事故初動対応の重要性を理解し、授業や部活動等の体育活動中の事故を未然に防止するとともに、万が一事故が発生した際には、速やかな報告・連絡・相談体制により、被害を最小限にとどめる。</p> <p>④ 児童相談所や警察等と連携し、家庭内での虐待が予想される生徒の安全を確保する。</p>	<p>間で綿密に行った。教育委員会から配布されたカード等を活用し、生徒にSOSの出し方について周知した。</p> <p>③ スクールカウンセラーによる研修において、小さなサインを発見した際の対応方法についての情報の共有・確認を図った。</p> <p>④ 職員会議や服務事故防止研修等を通じて、平素からのリスク管理や事故発生時の迅速な対応及び情報の共有化の重要性を周知し、組織としての対応の仕方、報告・連絡・相談体制については徹底したが、一部、管理職への報告が遅れた例があった。</p>
ウ 生徒の変化を見逃さない体制の構築 【B】	<p>① 担任やスクールカウンセラーによる全員面接の実施</p> <p>② コンディションレポートを活用した支援が必要な生徒の早期発見</p>	<p>① 5月中にはほぼ1学年の全員面接を終了し、6月には気になる生徒の個別を行った。</p> <p>② コンディションレポートの周知が不十分で生徒が活用できていない。</p>
エ 保護者との良好な「顔の見える」関係づくり 【A】	<p>① 保護者が安心して学校教育への参画できるよう、保護者会を中心とした情報の共有化を図る。</p> <p>② ホームページを活用した保護者向け情報の発信(パスワードをかけた保護者向け文書の掲載)</p> <p>③ 大学進学に向けた不安を取り除くために3学年における三者面談の全員実施(1、2学年は任意とするが、企画並びに呼びかけの広報は実施する)</p> <p>④ 戸山会(保護者会)との連携の充実</p> <p>⑤ 学校評価による保護者の意向の把握</p>	<p>① 各学年年間3回、対面で保護者会を実施した。また、運動会、戸山祭等、保護者が生徒の様子を見る機会を設けた。感染対策を取りながら、保護者向けの授業公開も実施した。</p> <p>② 生徒に配布した文書を中心にパスワードをつけてホームページに掲載した。</p> <p>③ 3学年の三者面談を夏季休業期間中に多くのクラスで全員実施した。</p> <p>④ 保護者会との定期的な情報交換を実施した。</p> <p>⑤ 学校評価アンケートの自由意見により、保護者の意向を把握した。</p>

(7) 募集・広報活動

今年度の取組目標	具体的な方策	今年度の取組状況
ア 組織的な募集活動の充実	① 本校の特色や強みをデータで提示する等、わかりやすく中学生・保護者へ	① 本校の特色がわかりやすいような資料「この1枚でわかる!戸山

<p>【A】</p>	<p>アピールする。</p> <p>② 戦略的かつ効果的な募集活動を展開し、学校説明会、学校見学会だけでなく、学習塾の出張説明会等積極的に広報活動を実施する。</p> <p>③ 私立高校を意識した学校案内の刷新や「まなびゅー」や YouTube 等の動画の活用等、イメージ戦略を整える。</p> <p>④ 学校説明会や学校見学会の広報活動は全校体制で、学校行事として経営企画室職員を含めた全教職員が必ず関わりをもつ。</p>	<p>高校」をA3判1枚で作成し、説明会等で配布した。</p> <p>② 学習塾7校の対面による説明会に参加した。</p> <p>③ 生徒会による学校紹介ビデオを作成し、本校のホームページに掲載をした。</p> <p>④ 全校体制で学校説明会等の広報活動を実施した。感染症防止対策が不要になったため、オンラインによる説明会は実施しなかった。</p>
<p>イ ホームページを中心とした広報活動</p> <p>【A】</p>	<p>① 学校情報を適宜ホームページ掲載等、広報活動を充実させる。</p> <p>② カウンター機能を重視し、アクセス件数を把握することで、中学生や保護者の動向を探る。</p> <p>③ 在校生やその保護者向けに、適切な内容を随時掲載する。</p>	<p>① ホームページのリニューアルにより、頻繁にコンテンツの更新を行った。</p> <p>② カウンター機能を利用し、アクセス件数を把握した。</p> <p>③ 本校の様子を極力掲載できるようにし、年間更新回数は、688回以上、一日平均のアクセス件数は、4,500件を超えた。</p>

(8) 経営企画室体制

今年度の取組目標	具体的な方策	今年度の取組状況
<p>ア 学校経営への参画</p> <p>【A】</p>	<p>① 学校経営計画に基づき、学校経営に参画し、工夫を凝らした経営企画室運営を行う。</p> <p>② 教員と企画室職員が協働し、積極的な経営参画を図る。</p> <p>③ 働き方改革の一環として「費用対効果」と「時間対効果」を意識し、ICTを最大限活用して業務を遂行する。</p> <p>④ 学校の総合窓口として思いやりの心と品格を重んじ、全校の機能をスムーズに調整する。</p> <p>⑤ 業務全般を理解するとともに、担当部署のスキルアップを図ると同時に課題意識を常にもち、組織的に業務改善を図っていく。</p>	<p>①② 会計年度任用職員3名を含め、経営企画室全身体制による学校経営への参画により、スムーズな事務処理、適切な予算執行ができた。</p> <p>③ ICTを最大限活用し、電子起案率100%を達成することができた。</p> <p>④ ワンストップサービスとして、経営企画室の窓口業務、電話対応について適切に実行できた。</p> <p>⑤ 業務改善を意識し、室長及びベテラン職員による若手採用職員の育成も適切に実行できた。</p> <p>⑥ 学校行事等にも、経営参画の一環として、参加出来た。</p>

	⑥ 学校行事や保護者会活動等にも積極的に参画する。	
イ 適切な予算執行 【A】	<p>① 計画的な予算執行により、円滑な学校運営と予算の有効活用と一般需用費におけるセンター執行率の向上を図る。</p> <p>② 教員との連携により、中長期的見通しに立った施設・設備・備品等の更新を図る。</p> <p>③ SSHやTM等の特別予算を計画的かつ適正に予算執行する。</p> <p>④ 図書館運営や施設管理において委託業者と連携し、適切な運営を図る。</p>	<p>① 新型コロナウイルス感染防止対策による、緊急性のある予算執行もあったが、ほぼ予定通り進めることができた。</p> <p>② 中・長期的な視点に立った予算編成指針を策定したが、適切な予算執行を行うことができた。</p> <p>③ SSHやTM等の特別予算を活用し、教育活動に必要な消耗品等を購入した。また、働き方改革の一環で職員室の整備事業の予算で多機能の印刷機を活用することができた。</p> <p>④ 委託業者との連携により、適切な運営を行えた。</p>
ウ 関係団体との連携	<p>① 保護者会（戸山会）との積極的な連携を図り、校務運営を支える。</p> <p>② 同窓会（城北会）と連携を図り、学校の適切な管理を行う。</p>	①② 戸山会及び城北会との連携により、卒業生講話や校務運営を適切に実行できた。また、城北会の在校生の予納金については、学校徴収金としての委任業務を切り離し、適切な関係へと整理できた。

## 2 重点目標と数値目標

重点目標	具体的な数値目標（令和4度・令和3年度達成数値）	達成数値
学力向上（総合偏差値）	<p>定観測の11月のベネッセ模試総合成績における総合偏差値</p> <p>1年生 74以上 <b>65名</b>（55名・65名）</p> <p>68以上 <b>190名</b>（205名・191名）</p> <p>60以上 <b>300名</b>（299名・301名）</p> <p>2年生 74以上 <b>45名</b>（20名・21名）</p> <p>68以上 <b>140名</b>（183名・101名）</p> <p>60以上 <b>270名</b>（213名・233名）</p>	<p>53名</p> <p>174名</p> <p>297名</p> <p>30名</p> <p>115名</p> <p>238名</p>
進学指導重点校としての進学実績	<p>① 大学入学共通テスト5教科以上受験者 <b>290名</b>（284名・283名）</p> <p>② 同上760点（約85%）以上 <b>40名</b>（39名・12名）</p> <p>③ 東京大学現役合格者 <b>10名</b>（7名・10名）</p> <p>④ 難関国公立大学（東大・京大・東工大・一橋大・国立大医学部医学科）現役合格者 <b>35名</b>（34名・33名）</p> <p>⑤ 国公立大学現役合格者 <b>145名</b>（120名・142名）</p> <p>⑥ 国公立大学医学部医学科現役合格者 <b>4名</b>（8名・2名）</p>	<p>284名</p> <p>52名</p> <p>8名</p> <p>46名</p> <p>136名</p> <p>10名</p>

	⑦ 早慶上理現役合格者 <u>175名</u> (192名・172名)	211名
募集対策の充実	① 学校説明会 (10、11月) 参加者 <u>2,800名</u> (2625名・1833名) ② 応募倍率 (推薦選抜) <u>4.65倍</u> (3.68倍・4.61倍) (学力選抜) <u>2.10倍</u> (1.94倍・2.07倍)	1660名 3.34倍 1.59倍
SSH第IV期指定校としてのSSH事業の充実	① 科学の甲子園等のコンテスト、研究発表会入賞者数 <u>38名</u> (32名・30名) ② 生徒の英語での研究発表 <u>50件</u> (17件・21件) ③ 授業公開、地域向け講演会、研究発表会の開催回数 <u>13回</u> (11回・12回) ④ SSHクラス以外の生徒向け理数講演会、教科融合型の講義、ワークショップ等の開催 <u>20回</u> (13回・20回) ⑤ 小・中学生向けの理科実験教室の開催 <u>6回</u> (10回・6回) ⑥ 理科教員向けの理科研修会の開催 <u>5回</u> (2回・5回) ⑦ 本校が主催するSWR (理系女子交流会) 発表校数と発表者 <u>3校60名</u> (4校11名・3校17名) ⑧ 本校で開催するTSS (生徒研究成果合同発表会) の発表校数と参加者数 <u>10校80名</u> (351名・10校44名)	23名 23件 9回 6回 7回 0回 4校19名 17校 12校 255名
Tokyo スマートスクールプロジェクト並びに「東京型教育モデル」の実現	① 暗記中心、チョーク&トークのパッシブな授業形態や過去の成功体験からの脱却した主体的・対話的で深い学びの授業実践 全教職員による実施 <u>100%</u> (71.2%) ② 校内Wi-Fi等を活用したICTによる全教職員による授業実践 <u>100%</u> (11.5%) ③ 全教職員によるOffice365の活用実践 <u>100%</u> (100%)	75.0% 74.4% 100%

### 3 次年度に向けた課題と対応策

進学指導重点校として、東大現役合格8名を含む難関国公立大学現役合格合計46名は、過去最高であった昨年度の34名を12名上回り、大きな成果を挙げることができた。また、国公立大学現役合格者数も昨年の120名台から136名と一昨年並みに回復し、進路部を中心とした学習指導や進学指導が一定の成果を収めたといえる。引き続き、校内の連携を強化しながら、生徒の希望進路の実現を図る。

本校の特色であるSSH活動は、海外から本校に訪れる高校も増え、本校もフランス海外研修旅行を実施できた。今年度はSSHの第V期申請の年であったが、残念ながら本校の研究計画は採択されなかった。これから2年間で第IV期を継続しながら、第V期申請に向けた準備を行う。中学生や保護者も本校のSSHに関心が高く、20年間築き上げてきたSSHの取組を失うことは、本校にとっても、東京都にとっても、本校に進学してSSHで学びたいと考えている中学生にとっても大きな損失である。

東京都教育委員会や同窓会等の御支援を受けながら、本事業を継続していく。

TM事業においては、都立病院や大学で見学や体験の機会を得ることができ、生徒のモチベーションを高めることができた。キャリア教育だけでなく学習指導にも力を入れたことにより、国公立大学等の医学部現役合格者が昨年度の8名から今年度は過去最高の10名となった。

2学年まで観点別評価が導入されたが、3観点の評価と5段階の評定、観点の評価バランスやループ

リック評価の基準については検討の必要がある。

また、スマートスクール構想に基づき、一人1台端末の整備が進んでいるが、校内では道具として活用する意欲とスキルが未だ不十分である。成績処理においても、定期考査の採点や分析、観点別評価を行う際、便利な Realtendant の一層の活用を図るなど道具として I C T を活用する雰囲気在校内に醸成する必要がある。来年度も I C T を活用した働き方改革を推進する。

授業については、チョーク&トークの一方通行の授業を行っている教員がいる。単に知識を問う問題ではなく、考えさせる問題を投げかけ、生徒同士の協議の時間をとるなど、生徒の活動時間を増やし、主体的で対話的で深い学びを目指す。

教育課程については、SSHクラスの「情報Ⅰ」の「SSⅠ」・「SSⅡ」による代替、現行1単位設置の「地学基礎」、「知の探究Ⅰ」と「知の探究Ⅱ」の接続等、解決すべき課題があり、来年度も継続して審議を行っていく。